

隨泉寺寺報

平成 21 年 (2009 年) 12 月号 第 472 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法要

講師 龍善寺住職 宍戸 大観師

講題 『如来大悲の恩徳』

■報恩講 ～浄土真宗をしのぶ行事～《親鸞聖人の徳に報います》

報恩講は浄土真宗門徒にとって、一年中でもっとも大切に、親しみ深い行事です。浄土真宗の御教えを明らかにしてくださった宗祖・親鸞聖人の法要だからです。

聖人は弘長 2 年 (1262 年) 11 月 28 日、(新暦 1 月 16 日) 90 歳の生涯を京都でとじられました。聖人のご恩に報い、お念仏を一層ありがたく味あわせていただくということから「報恩講」と呼ばれるようになったのです。西本願寺では 1 月 9 日～16 日までつとめられます。

さらにこの期間と前後して、お寺を中心に一 の家庭でもおつとめをします。おつとめは特 むつかしくはありません。秋から冬にかけてご門徒のおうちをお参りいたしますので、家族そろって、おつとめをしましょう。この時のお仏壇の荘厳 (しょうごん) 《お飾り》は、ローソクは赤、打敷 (うちしき) は金襴などのあざやかなものにします。

12 月の法座予定

- 12 月 1 3 日 …… 掃除 井原
- 12 月 1 4 日 昼席午後 1 時より …… 報恩講法要
- 12 月 1 4 日 夜席午後 7 時より …… 出張法座 井原集会所
- 12 月 1 5 日 朝席午前 10 時より …… 報恩講法要 おとき
- 12 月 1 5 日 昼席午後 1 時より …… 報恩講法要
- 12 月 3 1 日 午後 11 時より …… 除夜会・元旦会
- 1 月 6 日 午後 6 時より …… 門信徒会本部役員会



☆ 幸せって？ 私が生きることの意味は？

『幸せってなんだっけ なんだっけ ポン酢しょう油のある家さ』という明石家さんまのテレビコマーシャルを見ていた子供が、

『ねえ、お母さん、うちにポン酢しょう油ある？』

『あら、あいにく きらしちゃってないわ』

と答えたら、子供はすかさず

『じゃあ、うちは幸せじゃないんだ』

お母さんはあわてて隣の家からポン酢しょう油を借りて来たら、子供は、

『幸せって、借りて来るものなのか…』

また、この話にはもう一説あり、お母さんは、隣の家には行かず、スーパーに買いに行った。すると子供は、

『幸せって買うものなの？』

この話は大変皮肉な言い回しではありますが、本当の幸せとは何かを考えるヒントを与えてくれています。

ところで、いま国の予算の事業仕分けという事が話題になっています。驚きました。国の予算の大半は借金で成り立っているのです。入ってくる収入は、国税が 40 兆円ぐらいで、支出は 90 兆円しようというのです。

本当に 90 兆円の予算は必要なのでしょうか。幸せのためにはポン酢しょう油が必要なので、隣の家からポン酢しょう油を借りてこようという話です。なかったら赤字国債という借金をして、ポン酢しょう油を買うのです。本当の幸せというのは、ものがあったり、便利という事だけではいいような気がします。



現代は「物で栄えて心で滅ぶ」時代だと言う人がいます。しかし、物は嘘をつかず、欲望を持たないのです。物を欲望の対象として消費しようとするのは心です。「現代は物質的欲望に対する心の歯止めを失った時代だ」という方がふさわしいでしょう。



仏法を信じて何の得がある、何の役に立つと言う人がいます。しかし、私たちは、役に立つために生まれてきたわけではありません。得するために生きているわけではありません。

生きるために損得を考え、生きるために役に立つとか立たないとかを判断しているのです。では、苦悩多き人生、しかも必ず終わる人生を生きることに何の意味があるのでしょうか。

私が生きることの意味は、私自身が見つけていくより他はありません。私がそれを見つけ出し、いくためのよりどころとなり、励ましとなるものが仏法だと思ふのです。

人生を耕せてもらう道 それがお念仏

よいことばかりやってくるように
つらいこと
苦しいことはやってこないように
そんなことを願っても
それは 無理というもの
どんなことが やってきても
おかげさまでと
それによって
人生を 耕させてもらう道
人生を深め
豊饒にさせていただく道
それが
お念仏の道
悲しみや さみしさで
人生を 深めさせてもらう
のっぺらぼうの
浅い人生では
申しわけないから
南無阿弥陀仏



『愚の力』 大谷光真門主

ご門主のご著作『愚の力』が文春新書（文藝春秋刊）から発行された（ 真）。「末法の世に生きる現代人よ、愚者になれ」と銘打たれた本書は、現代の課題を次々と明らかにして、「人間中心の考え方」に警鐘を鳴らしながら、具体的にこの時代をどう生きていいのかわかを明らかにされている。

本書は6章から構成されているが、「いま私たちは歴史の大きな転換期にあって、個人の生活でも、社会的にもさまざまな問題を抱え、不安のなかにいる（はじめに＝要旨）」として、1980年にご門主が発表された「教書」のころをもとに、1章「不安の時代を生きる」、2章「私はいただきもの」、3章「人間は死 ものだ」で、世界的経済危機、格差社会など社会問題から「直葬」などの状況も踏まえて「一切衆生」をキーワードに浄土真宗に触れられている。

4章「親鸞聖人の生き方」では、聖人のご生涯をたどりながらご結婚、流罪、義絶などご門主のご見解を述べられている。

5章「末 者として」、6章「愚者になる」では、具体例を示しながら「まず、自分の愚かさを認めることからはじめないと、現代社会において一切衆生は容易には回復されません。人間中心であればあるほど私という人間を失っていくのです」と述べられている。

終章には「ダライ・ラマ14世との対話」があり、ここでは真宗理解や平和・科学と仏教、宗教者間の協力、霊魂についてなど突っ込んだ対話があり、必読の書である。

☆成道会 12月8日

いのちを見つめる智慧

成道会（じょうどうえ）（おさとりの日）（12月8日）

12月8日は、人間として生まれ、人間の幸福について悩み続けられたお釈迦さまは35歳のこの日、菩提樹の下でついに「お悟り」を開かれ 仏陀（ぶつだ）（覚者）となりました。この尊い成道の日を記念して法会を「成道会」といいます。

なに不自由のない生活を送っていたお釈迦さまが、人の世が老病死の苦に満ちている ことを見抜き、そうした苦から脱出する道を探求めて、出家を決意したのが29歳のことです。

人間として生まれ、人間の幸福について悩み続けられたお釈迦さまは、肉体を痛めつける苦行をすることで、苦からの脱出の道を探求めましたが、やがて、苦行では苦の問題を解決することはできないと判断し、それを中止しました。そして、やつれた体を村娘の供養した 乳粥（ちちがゆ）でいやしたお釈迦さまは、大きな 菩提樹（ぼだいじゅ）の下で 瞑想（めいそう）して、ついに悟り（覚り）を開かれ、仏陀となりました。35歳のときでした。

成道とは覚り（悟り）を開くことです。覚りを開くとは、悩みや苦しみを超える深い智慧を身につけることです。

（いのちを輝かす智慧を求めて）

老病死に苦悩することは誰もが経験します。一方、限りあるいのちの中に限りない輝きを見だし、自他のいのちを輝かす道を見いだすことは、先人の深い智慧に学ばなければできないことです。

本当の智慧、あらゆるいのちを輝かす智慧、それが自己との てしない苦闘の末、釈尊が体得された、悩みや苦しみを超える深い智慧（覚り）でした。

